

天使が隣で 眠る夜

REGARDE
LES HOMMES
TOMBER

原作／テリー・ホワイトの傑作「真夜中の相棒」

95年セザール賞3部門受賞

94年カンヌ国際映画祭批評家週間出品

君が眠れない夜は僕が添い寝をしてあげよう…
大人になれない子供たちの
危険な童話が今、始まる。



ジャン＝ルイ・トランティニャン マチュー・カソヴァッツ ジャン・ヤンヌ ビュル・オジェ

監督◎ジャック・オディアール 原作◎テリー・ホワイト「真夜中の相棒」文庫文庫 脚本◎アラン・アンリ／ジャック・オディアール

撮影◎ジュラル・ステファン 編集◎ジョエル・ウェルフィン／モニク・ダルトン 音楽◎アレクサンドル・デラ

1994年／フランス／カラー／ビスタサイズ(L.66)／100分／配給◎シネカノン



男たちの微妙な心理をスタイリッシュに描き切った90年代のヌーヴェル・フィルム・ノワールが遂に登場!!

ある刑事を撃った二人組の男と、彼らを追いつめる刑事の友人の男。それぞれの生き様を浮き彫りにした二つの物語が、複雑に絡み合いながら次第にスリリングな三角関係のドラマに発展していき、意外な結末を迎える。

フィルム・ノワールタッチで描かれる“殺し”の物語の裏には、三人の男たちの壮絶な人間ドラマが展開する。しがたない賭博師と中年セールスマン。ともに人生の半ばを過ぎて方向を見失い、いつまでも“大人になれない宿命を背負った子供”のような男たち。そんな彼らの前に一人の青年が現れる。少し頭が弱いように見える彼の、天使のように純粋無垢な心に触れた男たちは、とまどいながらも次第に心を開いていき、やがて愛とも友情とも呼べる新しい感情に目覚めていく。

M・カンゾヴィツ、彗星の如く現れた新しい才能にバリは話題沸騰!!

94年カンヌ国際映画祭批評家週間で「今年一番の収穫」と話題をさらった本作は、女性にはほとんど登場せずフランス映画につきものの男女の恋愛や甘いロマンスなど一切ないにもかかわらず、不思議なセクシャリティの漂う作品となっている。

バリではスマッシュ・ヒットを記録し、監督デビュー作としてはまさに「驚異的な数字」と評された。フランスのアカデミー賞にあたるセザール賞では最優秀新人監督作品賞、最優秀新人男優賞、最優秀編集賞を受賞し(最優秀脚本賞はノミネート)、改めて作品の評価の高さを知らしめた。

監督のジャック・オディアールは1952年に生まれ、長く編集や脚本の仕事に携わり、これが監督デビュー作。脚本家として『死への逃避行』や『バルジョーで行こう』などを手がけている。賭博師マルクスを演じるのはフランス映画界を代表

する名優ジャン＝ピエール・ルナディニヤン。一時引退宣言をしたものの、「オディアールの脚本に惚れ込んで」出演を快諾し、『トコロール/赤の愛』に引き続いて新しい魅力を発揮している。マルクスの相棒ジョニーは27歳の新人マチュー・カンゾヴィツ。若くて無邪気でありながら決して軟弱ではない複雑なジョニー役を見事に演じ切り、セザール賞最優秀新人男優賞を受賞。一躍バリで最も注目を集める期待の新星となったが、現在は自身の監督作品二作目を制作中である。

原作は日本でもカルトな人気を誇る、女流ミステリー作家テリー・ホワイトの処女作にして最高傑作の『真夜中の相棒』(文春文庫)である。

大きく澄んだ目、白い肌、赤い唇…。いや、大人のくせして、その顔にはまるで幼児のような可愛らしさがたっぷり残っていて私はこの俳優がいつまで好きになってしまった。——長沢諭(画家)

- 登場人物のそれぞれの運命がすれ違いながら、やがて大いなるラストでひとつに導かれていく過程が、まるでゲームのように刺激的。——リベラシオン紙
- 新しいシネアストの誕生! この映画は運命に囚われた愛の行方を探そうとする。——エル誌
- 愛と友情と死が男たちの中で完全にひとつに溶け合う瞬間がある。——レクスプレス誌

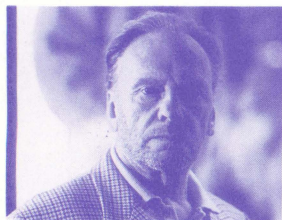
セザール賞
3部門受賞!

堕ちていく男たち

黒田邦雄(映画評論家)

子供であり続けることを宿命づけられた男が、本能というようなもので自分を理解してくれる大人を見つけ、すがりついていく。その大人もまた、大人の社会からはみ出して、親にはぐれた子供のように、さすらいの人生を送っている。二人の(子供)が寄り添うのはまさに宿命であり、彼らは限りなく現実というものから堕ちていく。

映画化された『天使が隣で眠る夜』は、ホワイトのこんな世界を実に



映画的に再現してみせ、読者にも映画ファンにも満足のいく仕上がりとなっている。

当初、全く関係のない二組のカップルが別々に描かれ、最後には、ジョニー、マルクス、シモンによるトライアングルな愛へと形を変えていく過程が、戦戦兢兢なまでに面白い。小説の構成と同じなのだが、二つの話を交互に語ったり、時間をずらしたりするスタイルは、映画の方が圧倒的である。噛んで含むようにストーリーを追っていく原作と違い、映画の方は大胆な省略法を使って、観客をおきざりにしかねないスピードで進んでいき、テンポとスリルを見事に盛り上げている。

原作の持つメンタルな部分を極力少量にし、少々説明不足より脈拍にも似た映像のときめきを重視したこと、三人の男たちのあやうい世界が、肉体的感覚として伝わってくる。一体何が起きているんだと

いう観客の不安と戸惑いが、いつしかしびれるような快感に変わること、この演出は確信している。シモンの部屋のSM写真のピンナップが繰り返してクローズアップされるが、この映画の演出そのものがSM的快感によって行っているといえる。

オディアールは映像の速度を存分に生かして、勢いを付けてまさかさまに堕ちていく男たちのデカダンスを冷ややかに見つめている。憧憬やつくしきという、男の秘めたる生理をこれでもかとあぶり出すのだ。この映画の原題は、“奴らの堕ちざまを見る”というような意味だが、さて、三人の男たちが堕ちていく先はどこだろう。言うまでもなく子供(の国へ)である。

こういう仕組みであれば、あきらかにフィルム・ノワールとして作られているこの映画でも、ホワイトの小説が持つ童話性を無視することは不可能だ。ジョニーが“隣りに寝てもし

い?”と言いつつシモンのベッドにもぐりこむところなどを見ると、これは眠れない淋しがりやの子供のための危険な童話、という感じさえしてくる。ランティニヤンがかつて主演した『狼は天使の匂い』というフィルム・ノワールの傑作があったが、そのプロローグで、くわしたたちは寝る時間が来るのをいやがってさわぐ年をとった子供でしかないの(だよ)というルイス・キャロルの言葉が字幕で出たのを思い出した。フィルム・ノワールとは、眠れない年をとった子供のための映画なのかもしれない。

(プレスより抜粋)



5月下旬ロードショー公開

特別鑑賞券1,400円/ペア券2,600円好評発売中!

(当日料金: 一般1,800円/学生1,500円/シニア1,000円)

都内各プレイガイド、チケット・セゾン、チケットぴあにてお求め下さい。

西武ロフト館前・渋谷三葉ビル7F

渋谷シネパレス 03 (3461) 3534

連日	11:30	1:35	3:40	5:45	7:50
----	-------	------	------	------	------

